特別編　釜石レポート

～地域包括ケアのまちに向けて～

公益財団法人　さわやか福祉財団
北海道ブロック　インストラクター
釜石市平田第６仮設住宅ふれあい支援活動
リーダー　丸藤　競
（函館市地域交流まちづくりセンター長）

日頃は、まちセンのセンター長の私ですが、同時に、地域にふれあいや絆をつくりだす活動をしてる、さわやか福祉財団のインストラクターでもあります。この度、活動の一環として釜石市平田第６仮設住宅の支援活動に関わることになり、釜石市へ行ってきました。今回は、その現場報告です。

９月１１日夜、車で釜石市に入る。釜石は、人口３万９千人。今回の震災で、１１００人以上の方が亡くなり、４千３百棟以上の家屋が被災した。「被災地」に入るのは、初めてだ。緊張感のなか車を進めるが、市内に入りしばらくは被害のなかった地域が続く。普通にお店が開き、車が行き交っている。違和感を感じつつ、さらに車をすすめた。それが、釜石駅を通り過ぎ甲子川を渡り大町の商店街方面に入ったとたん、風景が一変した。街灯もなく信号機も壊れたままの暗闇。宿泊先のホテルは、この暗闇の中にあった。１階は被災を受け工事中。ベニヤ板に囲まれた通路を進みチェックインを済ませた。

翌朝、釜石市内を周る。廃墟。堤防を乗り上げた大型貨物船。地盤沈下による浸水。無数の蜘蛛の巣。グチャグチャに壊された車が辺りにいくつも放置され、廃墟の壁にはここで遺体が見つけ出されたという印が連なる。隣接する大槌町へ。大槌は、町長を含め役場職員の多くが死亡し、復興が大幅に遅れている地区。津波と同時に火災も発生した。壊滅的。優秀な大道具さんが、映画の撮影のため意図的に創作したとしか思えない。いや、そう思うしかない景色。全てが完全に壊されていた。いったいこの場所はどうすればいいのか？全く考えられない。

遠野災害ボランティアセンターを訪ねる。遠野は、大槌・釜石・陸前高田などからそれぞれ車で１時間程度にある岩手県内陸部の町。遠野物語や河童、座敷童で有名な民話の里だ。その遠野に、国内外から多くの団体や個人が集まり、復興支援活動を行っている。ＮＰＯ法人遠野まごころネットが遠野市福祉センターを活動場所として、ボランティア派遣やそのための各種後方支援を行っているのだ。

センターに入り感じるのは、集まっている人が皆、使命感と目的意識を持ち、効果的な活動を心がけていること。現場力の凄さ。受付に入るとまず目に付くのは、「～私たちの合言葉～ボランティアは自己完結」というタイトルの手書きで書かれた模造紙。そして、「活動や生活に必要な物資は、自己調達・自己処理。体調管理もしっかりと！！※生活ルールを守ろうね。ココでは、団体生活です。周りの方への心配りをお願いします。」と続く。体育館で雑魚寝し、シャワー室の利用は女性も１５分まで。そのような中、多くの若者が活動していた。

釜石駅から車で１０分ほどの所に平田（へいた）第６仮設住宅がある。そこで、ふれあい・支えあいづくりを実践するのが、私の主な活動だ。阪神淡路大震災の教訓をもとに、ここでは全２４０戸のうち、ケアゾーンと呼ばれるコミュニティ型の仮設住宅が６０戸建てられている。屋根付きのウッドデッキで各住居をつなぎ、玄関を向い合せにし顔が見える仕組みをつくった。併設されているサポートセンターには福祉関係のスタッフが２４時間常駐し、高齢者の支援活動や１日２回の巡回をしている。要介護者への配食やデイサービスも始まり、診療所ができ、スーパーもオープンする。一般の仮設住宅と比較すると、かなり恵まれたハードが用意されている。ふれあい、支え合いができやすい仕掛けができている。しかし、そこに相応しいソフトを入れなければ、効果的な運営は難しくなる。つくりっぱなしでは、ふれあいも助け合いも、絆も、住民の自主性や生きがいも生まれない。

そこで、住民が自ら動き出したくなるように促すことを常に念頭に置きながら、ふれあいの場をつくっていくことが、私の主な任務となる。とは言え、行っていることは実にささやかだ。ウッドデッキの一角に、『太陽のひろば』と名付けた交流の場（サロン）を設け、机やイス、お菓子や飲み物を用意し、あとは集まってくる人たちの話を聞くこと。まずは、できることからやっていく。それしかないと思っている。

１２日、初めて平田の仮設を訪問した時はまったくゼロの状況だったが、近隣の仮設の状況を見て周り、地元の人から話を聞き、まちの状況を感じていく中で、１７日には１回目のサロンを開くことができた。嬉しいことに、住民の中から、自分も『太陽のひろば』の運営をしたいと言ってくれる人も現れた。ウッドデッキスペースに自分たちで作ったイスや机を置きたいというアイデアも出るようになった。そういった一つ一つが、復興に向けての歩みになっている。

さわやか福祉財団が目指しているのは、地域包括ケアのまちづくりだ。

つまり、最後まで尊厳を持って暮らせるまち。どんな状態になっても、自宅で自分らしく暮らせるまち。そのために、２４時間巡回サービスが行き届いているまち。自分らしく暮らすためには、子どもたちも含め地域の色々な人たちとのふれあいがあり、その中で生きがいを持って暮らせるまちだ。

震災に遭わなかったまちも、不幸にして遭ってしまったまちも、この地域包括ケアのまちづくりへ向けた動きが必要だと考えている。

釜石でも同じ。今後、実現のためしばらくの間釜石に通う事になるだろう。休日をやりくりしての活動なので、時間的にも体力的にも大変になるかもしれない。しかし、後に悔いを残さないためにも、今、動くことが必要だと考えている。

私が釜石に行く前日、まちセンのスタッフが心のこもった壮行会を開いてくれた。その時贈ってもらった旗に「復興の太陽」が描かれていた。その太陽の絵が、平田仮設住宅復興のシンボルマークとなり、施設内にはためくことに決まった。私にできるのは、釜石でのささやかな活動にすぎないが、多くの人が自主的に様々な動きをしていくことで、東北の地に元気で明るい太陽が輝くことを願っている。